

「もうすぐ映画公開だ！記念」

恋人はスナイパー

エピソード3への道（エピソード1と2の間にあった？おとぎばなし）

御伽噺・鬼神（きじん）編

謡曲「紅葉狩（もみじがり）」

観世小次郎信光（1435 1516）作

<あらすじ>

信濃の戸隠山（とがくしやま）の奥深く、高貴な美女（紅葉）の一行が紅葉を愛でながら酒宴を催している。そこへ鹿狩りにやってきた平維茂（たいらのこれもち）一行は通り過ぎようとするが、貴女の誘惑には勝てず、宴に加わることになってしまう。酔って眠ってしまった維茂の夢の中に、八幡大菩薩の使者が現れ、美女の正体を明かし太刀を与える。目を覚ました維茂に襲いかかる鬼女（先ほどの貴女）。維茂は太刀によって退治する。

「時雨（しぐれ）を急ぐ紅葉狩 時雨を急ぐ紅葉狩 深き山路（やまじ）を尋ねん」

もう午（ひる）を過ぎてから、だいぶたっている。初夏とはいえ、このような山の中では日が暮れるのも早いし、寒さもふもとの村とは比べものにならない。

それなのに、男は宿を探す様子もない。むしろ、もっと山の奥深くへ入って行こうとしていた。肩に担った小さなリュックの痛み具合からして、だいぶ長い旅をしているらしい。

辺りの様子をうかがう鋭い目が古ぼけた写真の上に落ちる時、なんとも言えない寂しいものになった。射撃養成所の軍人たちに抱きかかえられた8歳の彼の手に、祖父が必死に握らせてくれた母の写真だ。この小さな手掛かりに、しがみつくようにして生きてきた。

「追われている」

そう感じてから、予想よりも早く彼らは目の前に現れた。明らかに土地カンのある連中だ。ふもとで聞いた噂は畏だったのだ。母はこの山にはいない。

「組織に戻って来い、王凱歌」

男はとっさに林の中へと身を躍らせた。3人の刺客も後を追って飛びこんだ。

「げにやながらへて浮世に住むとも今ははや 誰（たれ）白雲（しらくも）の八重葎（やえむぐら） 茂れる宿のさみしきに 人こそ見えね秋の来て 庭の白菊 うつろふ色も 憂き身のたぐひと哀（あわれ）なり あまり寂（さみ）しき夕まぐれ 志（し）ぐるる空を眺めつつ 四方（よも）の梢もなつかしさに」

（身分の高い女たちが、都を追われた境遇を嘆いている）

日の光の最後の一筋が山の向こうに消え、もうすぐ空は紅から蒼へ変わり、やがて墨を足していくように、深い闇へとのみこまれていくだろう。そんなあやふやな時のはざ間に、謡が流れ込んできた。

そのわびしい声に、2人の女との他愛ない会話を愉しんでいた青年が、ふと顔を上げる。薄桃色の衣（きぬ）をふわふわとまとった女性たちと、杉木立の中を散策しているところである。男は妖異ではないが、里の若者でもないようだ。

「さなきだに人心（ひとごころ） 亂（みだ）るるふしは竹の葉の 露ばかりだに受けじ
とは 思ひしかども盃に 向へば變（かわ）る心かな されば佛（ほとけ）も戒（いまし
め）の 道はさまざま多けれど 殊に飲酒（おんじゅ）を破りなば 邪淫妄語（じゃいん
もおご）ももるともに 亂れ心（ごころ）の花かづら かかる姿はまた世にも たぐひ嵐
の山桜 よその見る目もいかならん」
（平維茂に酒を勧める貴女）

真っ白な母の胸に抱かれる嬰兒（みどりご）のように咲いている水芭蕉（みずばしょう）の花の舞台の上で、あやかしのものが男を誘惑する女を舞っていた。はかない花を傷つけることなく謡い舞うものは、能面かと思まがうほどの白く冷たい顔に、女の内なる企みと艶を含んでいた。舞風（まいかぜ）に揺れる長い髪は、水芭蕉の花明かりと共鳴するかのごとく白い。

その肌の白さは、白という色の、まだその向こうにある透き通るような白とでも表現しようか。それを包んでいるのも、白い着物であった。そして、その足が水芭蕉の上を舞うごとに、花にはうっすらと霜がついた。

木の陰に身を隠して鑑賞している者たちがいる。先ほどの青年とその連れの人たちであった。昼間でもなお暗い湿った林の中では、まわりよりも早く夜が訪れる。女たちは脅えて、男に体を寄せてきた。その感触を楽しみつつも青年は、氷の扇を手に舞う彼（か）のもの舞台の後ろに、真っ赤に燃える紅葉を見ていた。

「堵隠命（とがくれのみこと） あの方も神ですか？」

命の肩に手を置き、うっとりとしながら女が訊ねた。

「いや、あれは雪の精だよ」

「まあ、恐ろしい。雪女ですか」

大きな音がした。扇が落ちて、水芭蕉の白い苞（ほう）を揺らした。たぶん人間にとっては空耳と、流してしまう位の音だったろう。だが、女たちは小さな悲鳴を残して、姿を消してしまった。あわてて追おうとした堵隠命だったが、遅かった。

「また、盗み見か」

その抑揚のない言い方にぎょっとして振り返ると、男が立っていた。黒い髪は肩にかかるほど、姿形も街でよく見かける若者のそれと変わらない。冷気を含んだその瞳の持ち主の名を、命が呼んだ。

「雪那（せつな）」

先ほどの舞姫であった。

「美しいものは、こうして見るのがよい」

そう言って、男神は悪戯っぽく指で丸く輪を作り、そこから覗いてみせた。

「山桜の精たちが、逃げてしまったな」

「そうなんだよ。やっと、くどいたのに・・・」

命はがっくりと肩を落とした。

「ま、お前のおかげで、良い時を過ごせた。だが、なぜ『紅葉狩』なのだ？今は」

再び、あの音がした。2人の心が暗くなった。人間の作り物の中でも「銃」は、彼らの最も嫌いな物の1つだった。

堵隠神社の奥の社（やしる）の裏に、3人の狩人が手負いの獲物を追い詰めていた。月が昇り始めていたが、その光はまだここまでは届かない。星だけが夜空を彩っていた。その星々よりも更に気配を消した影がふたつ、人間たちの成り行きを見守る。

「あきらめるんだな、王凱歌」

異国の名に、堵隠命が興味を持った。それは雪那も同じらしい。が、少し違ったようだ。
「あいつ・・・鬼の子だ」
「え？ふーん、それで『紅葉狩』か。お前の予感が当たったな」

凱歌は追い詰められると、却って冷たく冴え渡る勘を頼もしくもあり、悲しくも思った。それは多くの場合、人を殺すためのものだからだ。

3人の男のうちの1人が、銃を凱歌に向けていた。他の2人はその力に頼りながら、彼に近づいて行く。油断があった。

凱歌は左側の男に攻撃を仕掛けるふりをして、右側の男の足をなぎ払った。そして素早く左側の男へ、集中的に攻撃していく。銃を握った男が、必死に凱歌に照準を合わせる。

その時、雪那が冷たい息を吐いた。堵隠命が、意外、という顔で相棒を見た。

指ごと銃の引き金が凍った。焦る男が気がついた時、他の2人を倒した凱歌がもう目の前にいた。男の手ごと銃をつかむと、苦痛に開きかけていた彼の口の中に銃口を突っ込んだ。恐怖でぎゅっと目をつぶる。

「よせ！」

神が思わず叫んだ。次の瞬間、男は殴られたこともわからなかつたろう。気を失って、凱歌の足下に転がった。

凱歌は声のした方を見た。傷の痛みが熱をもっていたが、警戒を解くわけにはいかない。

「なぜ、撃たなかった？」

ちょうど射しこんできた月の光の中に、冷たく寂しい目が印象的な男が浮かび上がった。そしてその後ろからもう1人、整った顔立ちだが鋭い眼光の青年が現れた。

「もう、誰も殺したくないから」

凱歌は顔をうつむけた。彼らの崇高な視線に耐えられなかった。

「鬼の子・・・」

寂しい目の男（ひと）が、そう呼びかけてきた。見透かされたような気がした。

「いや、そうではないのだ」

眼光の鋭さが消え、何もかも受け入れてくれそうな優しい目となった青年が言った。

凱歌の意識が遠のく。人と言葉を交わしたのは久しぶりだった。あなたたちに訊ねたい。孤独の中で、僕はまだ狂っていないだろうか。

堵隠命が、社の中へ凱歌を運んだ。擦り傷だらけだったが、

「大きいのは、ここだけだ」

血に濡れたシャツの上から心臓を指差した。

「弾がまだある。できるか？」

「鉛に触るのは嫌だな」

そう言いながらも、雪那は手の中に氷の刃（やいば）を作り始めていた。

「心臓を凍らせないように」

「わかっている」

むっとしながら、凱歌のシャツの左側を切り裂いた。

「おっと・・・」

命がため息を漏らした。

「早太郎（はやたろう）・・・」

「だな。心（しん）を守ったというわけだ」

【早太郎伝説】

毎年、若い娘を人身御供に出させては食らっていた巨大な狒狒（ひび）を退治した山犬の子。

凱歌の左の肩から心臓にかけて、まるで後ろから抱くように、その刺青は彫られていた。たぶん狼であろう、その額の真ん中に銃弾がめりこんでいた。

「もしも、早太郎(これ)を自分で入れたのではないとすると、肉親かあるいは恋人か……。いずれにせよ、この子への愛情が深い者だな」

命の言葉にうなずきながら、雪那が氷の刃を狼の額にあてる。

「気味の悪い冷たさだ」

刃を動かすと、コロコロと血のついた銃弾が床に転がった。

「お見事」

だが、雪那が否定した。

「あ！いけない」

凱歌の体が震え始める。

「凍え死んでしまう。あとはお前に任せた」

堵隠命は、急いで凱歌の体を抱いた。

「あーあ、これが鬼の姫だったらな」

「久しぶりに会ってくればいい」

そう言って雪那は外へ出て行った。

気をきかせたつもりか、と命が笑う。だが、それも一興と思う。辛く不幸な古(いにしえ)のできごとだが……。腕の中で哀れな鬼の子が母を呼ぶ。

「母さん……」

この温もりに思い出したか。難儀なことだな。しかし、私はお前の先祖(はは)を救えなかった。そしてあいつのことも。お前も、自分で道を切り開いていくしかないんだよ。

「王凱歌。異国の名を持つ者、どこから来た？」

「中国……」

夢の中で、凱歌は聞こえてきた声に答える。

「香港……いや……日本だ！」

凱歌は大きく目を開けた。という表現が正しいのか。そこはどこかの村だった。畑仕事をしている男たち、川で洗濯をしている女たち。その光景は昔の(奈良・平安の頃か)日本を紹介した絵本を見ているようだ。

「立てるか？」

凱歌の顔を覗き込みながら、男が訊ねてきた。見覚えがある。

「さっき、月の光の下で遭いましたよね」

凱歌は難なく立ち上がることができた。傷のために重かった体が、体重さえ感じない。

「ここは過ぎ去った時の中だ。お前の体はここにはないよ」

「え？なんですって？」

青年は笑って、まあいい、と言った。そのうちわかるだろう。

「ほら、あそこに、お前の先祖がいる」

指差された方を見ると、遊んでいる子供たちの輪の中に1人の女性がいた。

「子供たちはすくなついてね。村人たちも聡明な彼女を、尊敬するようになっていった」

美しい女だが……と凱歌が不審に思う。

「そう、あれは人ではない。鬼の姫だ」

「鬼？ですか」

「お前の生国(しょうごく)では、死んだ人間が鬼になるそうだな」

凱歌は苦笑するしかなかった。見たことはない。

「この国では、生きた人間が鬼になったりするが、彼女は生粋の鬼の姫として生まれた。邪な人間の仮親によって、都へ連れて行かれてしまったが、その純粋な心は失われることはなかった。少々、お転婆だがな」

凱歌が青年を見た。彼の頬が紅潮しているのがわかった。
「彼女の娘たちも美しかった……。ずっと、女の子ばかり生まれてきたんだが、ある年、男の子が生まれた。三百年ぐらい前の話だ。それがお前にそっくりでな」
「生まれ変わり、だと？」
「いや。お前はお前だ、王凱歌。だが、たぶん、鬼の血を引いている」

鬼の姫が子供たちと別れて、森の方へ歩き出した。後を追う凱歌。緑の葉の間から優しい木漏れ日が注いでくる。明るいい森だ。凱歌は、自分の生まれ育った竹の森を想った。
前を歩いている姫が振り返った。目が合ったような気がして、凱歌はどぎまぎしたが、彼女が見つめたのは、彼の後ろから近づいて来た1人の武将だった。狩衣の良く似合う、若く自信にあふれた男だ。

「あれは、都から姫を討伐に来た武将だ」

堵隠命がささやく。

武将は刀を抜いて姫に向かって来た。彼女は余裕でかわした。笑みさえ浮かべている。尚も切りつけてくるので、飛んで木の上へ逃げた。

「まだまだ！修行が足りぬ！」

そんな挑発するような言葉を投げかけると、木から木へ飛び移りながら逃げて行く。地上を武将が追った。

「ああ……。子を産んだばかりなのに、無茶をして」

「え？」

「都でさる高貴な方の寵愛を受けて身ごもったのだが、本妻とその実家の者たちに恨まれてな。それで、この山奥の村に流されたのだ」

武将が、姫が飛び移る前にその木を切り倒した。姫が、あっとなって落ちる。しかし、宙で回転して地上に無事に降り立った。武将が刀を捨て、素手で向かって来た。迎えうつ鬼の姫。2人は激しくぶつかり合った。拳や蹴りの応酬だ。その姿に、自分ときなこの姿が重なって、凱歌ははっとする。

「ほう。その娘、きっと、あの武将の血を引いておるぞ」

耳元で神の声がした。

彼の方を見ようとした時、拳がもう目の前にあった。反射的にそれを払った。拳を繰り出してきたのは、きなこだった。いつの間にか、武将の姿はきなこに、鬼の姫の姿は凱歌に替わっていた。あのビルの建設現場での戦いを思い出す。

「君とは戦いたくない！」

「あなたを、逮捕する！」

きなこが悲しい声で叫んだ。悲痛な拳や蹴りが凱歌を襲う。彼は防ぐしかなかった。

優しい光に木の葉が揺れる。太い木の幹の内に、生命の流れる音がする。

戦う凱歌ときなこの姿は、鬼の姫と武将の姿にも替わる。2組の男女が入り乱れて戦っているようだ。

凱歌の拳が、きなこの蹴りが互いの顔、すれすれで止まった。鬼の姫と武将の動きも止まる。先ほどまでの緊迫した空気は消え、あたたかなものが流れ合っている。

「ふたりは……」

凱歌の言葉に続けて堵隠命の声がした。

「お前たちと同じだ。恋に落ちてしまったのだ」

凱歌が拳を和らげ、きなこの頬に触れようとした時、いきなり後ろからがっしりとつかまれた。身動きもできず、ズルズルともの凄いい勢いで後ろへ引きずられていく。きなこが遠ざかっていってしまう。そして凱歌は地面に引き倒された。

「鬼の姫よ」

そう呼びかけてきた男が笏（しゃく）で凱歌の頬に触れた。彼の腕の中から見上げた切れ長の目は、妖しく欲望に光っていた。

「あれが、鬼の姫の敵（かたき）である」

気がつくや、凱歌は堵隠命の隣にいた。少し離れた場所で、鬼の姫が黒の束帯姿も凛々しい貴人に捕らわれていた。

「鬼だ」

「でも・・・」

と凱歌が口ごもった。鬼の姫と同様の美しさではない。先ほど見た彼の目の色を思い出して、ぞっとした。

「昔は、笛を愛した朴とつとした鬼の若者だった。都から来た人間に騙され、唯一の友である笛を取られてしまった。それ以来、すっかり心が捻じ曲がってしまったのだ」

【官那羅のはなし】

官那羅という鬼の持っていた「青葉の笛」を、在原業平が騙して取り上げ帝に献上した。鬼は取り返しに行ったが、返り討ちにされてしまった。

山奥に住み友もなく笛だけを愛していた鬼が、その時から人間への復讐を誓った。屈折した美貌で女たちを誘い、次々と醜い子供をはらませた。子供の鬼たちは父親に従順で、人間には恐ろしく凶暴だった。最強の軍勢ができ上がった。

鬼はひたすら機会を待った。そこへ鬼の姫が都から流されてきた。彼女をみこしにすれば、申し訳が立つ。

毎日姫の元へ通った。だが、彼女は無視した。彼の存在さえも。己の美しさを意識していた鬼は、傷ついた。落ちぬ相手に邪な恋心を抱く。彼女を妻にしようと躍起になった。

そうこうするうちに、都に噂が流れる。鬼の姫が兵を集めて攻め上って来ると・・・。すぐに討伐隊が組まれた。

「さあ、あの男を殺しなさい」

邪悪な鬼がささやく。

「わかりました」

そう言うが早いか、鬼の姫は彼の腰から剣を奪い、自分を抱きしめている鬼の胸に刺し通した。鬼がせせら笑う。

「わしの剣でわしは殺せない」

「だが、これが私の返事だ」

鬼の笑いが止まった。そこへ駆けつけた武将が、太刀を浴びせた。鬼のかぶっていた冠が、まっぴらつになって地面に落ちた。

「あ！」

思わず、凱歌が小さな叫び声をあげた。彼の額に角があった。

鬼の腕の中で、姫が必死に恋人に叫ぶ。

「堵隠命から剣を！」

じっと見つめていた命が、ふっと辛そうにうつむいた。その間にも彼女が叫ぶ。

「早く！行くのです！」

武将は、背中を向けると神社の方へ走り出した。鬼は黒い風のように舞い上がり、男の前へと降り立った。

凱歌が助けに行こうとするのを神が止めた。

「もう、終わったことなんだよ。変えられないんだ」

「お前だ！お前さえいなければ、姫はわしのものになっていた！」

嫉妬のために、鬼の顔も心も醜く歪んでいた。彼の手が空を切って、恋敵の首を落とそうとした。手応えはあった。勝ち誇った彼が見たものは……。

「姫！」

その手は、憧れてやまなかった鬼の姫の白く細い首に突き刺さっていた。声にならない叫びをあげ、鬼が泣いた。

「去……れ！」

気丈にも姫は彼に向かって、血の塊と共に言葉を投げつけた。死に際に立ち会うことも許されず、鬼は打ちひしがれて去って行った。

崩れ落ちるように恋人の胸の中に倒れこんだのは……鬼の姫ではなく凱歌だった。

服を真っ赤な血に染めて、きなこが泣きながら叫ぶ。

「ホイさん！」

「やめなさい！」

凱歌の目を堵隠命が、手の平でさえぎった。

「今、ここで見る必要はない」

「未来……ですか？」

叩きつけられた光景に、自分の生く破滅の道を暗示されたような気がした。

「あの女（ひと）が泣いていた……。僕は」

神が人差し指で、凱歌の口を封じた。

「それが、未来のすべてではない。人の心の動き、周りの変化によって、未来などいくらでも変わるのだ」

「神（あなた）は、未来を知っているのでしょうか」

「私にそんな力などない」

と神は自嘲気味に笑った。

「あったら、あの時、あいつを止めていた」

雪那のことだ。凱歌にはすぐわかった。寂しそうな白い影。冷静だが、決して冷たくはない。昔の知り合いに似ているというだけで、自分を助けてくれた。

「それはね、鬼の子と出会った頃が、あいつの一番幸せな時だったから」

「それで、僕を見る目があんなに悲しそうだったんですね」

森を切り裂くような笛の音が響き渡った。緑の空気が割れ、凱歌は滞った時から放り出された。

凱歌が目を開けると、堵隠神社の奥の社に寝かされていた。自分の肉体の感触を取り戻していく。社の中に、夏に満たない冷えた月の光が差し込んでいた。影が動いたので、そちらの方へ首だけ動かして目を凝らした。堵隠命が外の様子をうかがっている。

再び鋭い笛の音が聞こえた。怒りなのか、悲しみなのか……不気味に近づいて来る。

「何が……？」

小さな声がやっとでた。

「鬼が来る。滅びた鬼の念が来る。凱歌、お前の血の匂いに引き寄せられているのだ」

雪の結晶がひとひら、月の光に混じって舞いこんだ。それは命の頬について、溶けた。

「雪那が、お前を逃がせとやってきた」

奥の社に続くまっすぐな参道に、白い袴姿の雪那が立っていた。鬼を1人で迎えうとうとしていた。彼の身にまとわりついている空気が凍っていく。氷の扇を広げて、彼らが姿

を現わすのを待つ。

「かくて時刻も移りゆく 雲に嵐の声すなり 散るか真折（まさき）の葛城（かづらき）
の 神の契の夜かけて 月の盃さす袖も 雪を廻らす袂かな」
（貴女の畏にかかっていく維茂）

雪那が華麗に舞うたびに、月の光を受けたダイヤモンドダストがそれに合わせて舞い踊った。長い髪も雪風に舞う。参道が、たちまち白い雪の色に染め上げられていく。

山の向こうから、鬼の怨念がやって来る。笛の音を先頭に、彼らは再びこの地へ降りてきたことをよろこんでいる。森が恐れて震えた。

「鬼の姫が言っていた、あなたの剣は？それで鬼を倒せるのでしょうか」

すっかり感覚を取り戻した凱歌が、堵隠命のそばへ来て訊ねた。

「下の宝（ほう）の庫（くら）にあるが、しかし・・・」

「行きましょう」

言うが早いか、凱歌は外へ飛び出した。

「あ、おい！」

慌てて命は後を追った。が、呆然として立っている凱歌にぶつかりそうになった。

「どうした？」

「雪が・・・」

「ああ、雪那の雪だろう」

「いえ」

とまどいながら凱歌は、自分の手の平に受けた雪を神に見せた。

「紅いんです。紅い雪・・・」

驚いて、命も自分の手に雪を受けてみた。

「血の紅さだ。さっきの、お前を追っていた男たちが犠牲になったな」

凱歌の手の中の雪が溶けて、血だけがすーっと流れて落ちた。

「紅い雪が降ると、雪女の一族は力を失ってしまう」

命の顔が深刻なものになった。凱歌を引き寄せると風に乗った。

【日本未確認生物辞典 笹間良彦著】

甲斐地方の古い伝承・・・紅い雪が降ると雪女は男と通じ
子を生子、溶けて消える。

紅い雪が雪那の白い肌を汚していく。力を奪われ、彼はとうとうがっくりと膝を折った。鬼の子は無事に逃げたであろうか。自分のことよりも、彼のことが気になった。

雪を踏みしめながら近づいて来た者がいる。顔を上げると、束帯姿の男が立っていた。後ろで長い裾（きよ）をうやうやしく捧げ持っているのは、彼の息子だろうか。人間の真似をして、姫の気を引こうとしたのか・・・鬼よ。鬼は雪那を見下ろして言った。

「姫はどこかな」

その顔がぼやける。目の光まで失われてきたらしい。

宝の庫に風が舞い下りた。凱歌が堵隠命から体を離す。静かだった。月の光を借りて眺めると、初夏の初々しい葉の上に、露の玉が光っているのがわかる。そのくらい、凱歌のひとつひとつの感覚がいやに鋭くなっていた。

露を飛び散らせて、葉の陰から鬼が飛び出してくるのではないかと思う。過去という時

の中で出会った鬼の瞳が、凱歌を捕らえていた。あれは僕の瞳をうつしていた。僕は生きながらに鬼になっている。人を撃つ時の冷静さは、まさに鬼のものではないだろうか。

「凱歌」

自分の中の鬼の部分に魅了されようとしていた凱歌を、命が引き戻した。急がなくては、と、この神にしては珍しく少々焦りの色を見せた。神官たちが起きてこない。鬼の毒気にあてられて、身動きがとれないのかもしれない。

凱歌は神に促されるように、庫の中に入った。様々な文献や品物が展示してある新しい部屋を通り過ぎ、一番奥の古い部屋へと進んで行く。

堵隠命が箱をだしてきた。その中の頼みの剣は、頼りない光を放っていた。

「これは・・・」

凱歌が愕然とする。剣はその原形を留めぬほどに、砕かれていた。

「先の鬼との戦いでこうなってしまった」

雪那の呆れた顔が浮かぶ。これであいつが消えることになったらかなわないな、と思う。

「でも、降魔の力はあるのでしょうか」

案外冷静な凱歌の声に驚く。

「ああ、もちろん」

「矢を作って下さい」

「その手があったか」

頼もしい。やはりこの子は・・・。覚えているか、凱歌。先の戦いで、この剣を持ったのはお前だよ。お前とあの武将の子孫の若者だった。

剣の光に照らされた凱歌の横顔に、今を生きる男の姿があった。命は大昔の自分の感傷を心の奥底へと沈めた。

「父親を射抜け。そうすれば、子の鬼も消える」

命は剣の刃をかき集めようとした。が、凱歌がそれを止める。

「1本だけ」

「しかし・・・」

「1本だけ、お願いします」

昔愛した女の子孫が、それと同じ強い瞳（め）で自分を見た。

手水舎（ちょうずしゃ）に流れ込む汚れのない水にかけらをすすぎ、堵隠命はそれを口の中へ入れた。かみくだき、自分の力と剣の力を混ぜる。吐き出した時には、鋭い鏃（やじり）となっていた。美しく神聖な光を放っている。

【アマテラスとスサノオの誓約（うけい）】（古事記参照） 剣や玉を嚙んで吹き出した時、様々な神が生まれた。

雪那が最後の力をふりしぼって、鬼の腕をつかんだ。凍結の衝撃が走る。

「忘れたか。この手が白い喉を、切り裂いたではないか」

鬼は笛で、雪の精を打ち据えた。その恐ろしい真実を、お前が語るべきではない。

薄い唇をつけると、鬼の笛が泣いた。高く切ない音色が山々を貫いた。

それに応えるかのごとく、一条の光がこちらへ向かって来る。真っ直ぐに。そして奥の社の屋根の上に降りた。

堵隠命のまばゆい光の懐から現れた者がいる。その姿は能の衣装で隠されている。まさに、鬼女を現すうろこ模様の衣装だ。降りしきる紅い雪は、舞い散る紅葉に見える。白銀の衣装が映えて美しい。

【能 狂言鑑賞ガイド 小学館】

女の鬼の扮装には三角形が連続したうろこ模様の摺箔（すりはく）であるうろこ箔を用いる。

「おお！鬼の姫！」

鬼はそれが、姫であると信じて疑わない。ますます、笛の調を研ぎ澄ませていく。そんな父親の悦楽に刺激を受けて、子の鬼たちもその姿形をはっきりと現していく。父の笛に合わせて、自分の体を大鼓（おおつづみ）、小鼓（こつづみ）、太鼓にみたてて打ち鳴らし始めた。高揚していく鬼たち。

我慢できなくなった子の鬼が、ひとつふたつ、屋根の上へ飛んだ。とたんに、その黒い影がなぎ払われた。悲鳴をあげながら、彼らは闇の中へと消え去った。鬼女の衣装が、紅い葉の上に降る雪のように落ちていく。

食い入るように見つめる鬼。屋根の上に姿を現したのは凱歌。左手に弓を携えている。雪那に切られたためシャツがめくれ、左胸があらわになっている。狼が鬼を睨んでいた。

鬼の離子が、激しく力強くなっていく。

「不思議や今までありつる女 不思議や今までありつる女 とりどり化生（けしよお）の姿を現わし 或ひは巖（いわお）に火炎を放ち 又は虚空に焰（ほのお）を降らし 咸陽宮（かんにょおきう）の 煙の中に 七尺（しつせき）の屏風（へいふう）の上になほ 餘（あま）りてそのたけ 一丈の鬼神（きじん）の 角はかぼく 眼（まなこ）は日月（じつげつ）面（おもて）を向くべきやうぞなき」

（女が鬼の本性を現す）

後ろに控えていた堵隠命が、凱歌に一本の矢を投げた。矢を右手で受けとると、そこから山の水の清冽な流れが体中に行き渡った。冷たい心臓を抱きながら、狼の刺青が妖しく冴える。降魔の矢が、凱歌さえも魔と認め、その身を滅ぼそうとしていた。

凱歌は静かに足を左右に開き、矢を弦につがえた。鬼に向かって構えようとするが、神の弓は重い。筋肉が無駄に震える。傷口から血が滲みでてくるのを感じる。

すると、誰かがふっと後ろに寄り添った。堵隠命の気配ではない。

凱歌を仰ぎ見ていた鬼の顔色が変わった。

「姫・・・」

凱歌に鬼の姫の姿が重なる。凱歌の黒い前髪をかきわけるようにして、白い美しい角が姿を現した。

凱歌は強く鬼を見据えた。ゆっくりと弓を左右に引き分けていく。鬼の姫が凱歌から離れた。

「維茂すこしもさわぎ給わず 南無や八幡大菩薩と 心に念じ 剣（つるぎ）を抜いて 待ちかけ給へば 微塵になさんと 飛んでかかるを 飛び違ひむずと組み鬼神（きじん）の まんなか刺し通すところを 頭（こおべ）を掴んで上（あが）らんとするを 斬り拂（はら）ひ給へば 剣に恐れて巖へ登るを 引きおろし刺し通し忽（たちま）ち鬼神を従へ給ふ 威勢の程こそ恐ろしけれ」

（維茂、鬼を退治する）

凱歌の鬼の目がとらえていたものは、哀しく美しい標的。

矢を放つ。

凱歌は澄んだ笛の断末魔を聴いた。

鬼は異国の祈りの曲を聴いた。

「それは、裏切りの・・・アヴェマリア」

凱歌の言の葉に、鬼が首をかしげた。

「僕もいつか沈む闇の淵へ、今はあなただけを返そう」

月の夜、降りしきる紅い雪の中で、鬼が微笑んで散った。待っている・・・そう言ったのか。太鼓や大鼓、小鼓の音も砕け散る。子の鬼たちが父の後を追って消えた。

闇を見つめて立ちつくしている凱歌に、堵隠命が声をかけた。

「見事に、先祖の敵をとったな」

「いえ。ただ、あの人を助けたかっただけです」

そう言って凱歌は弓を命に返すと、屋根から飛び降りた。

凱歌は緑の草の上で、息も絶え絶えになっている雪那のもとへ急いだ。紅い雪は鬼と共に消え、もう彼の力を奪うことはなかったが、鬼の毒気が生命を蝕んでいた。

「食わないと、力が戻らんぞ」

いつの間にか、堵隠命も来ていた。

凱歌は雪那の手をとった。冷気が奪われている。少し熱ももっているようだ。このままでは溶けて消えてしまう。

「僕の命を」

「馬鹿言え。鬼の精気など吸ったら、こちらの命が危ない」

「少しなら、食っても大丈夫なんだろう。今だって、立てもしないじゃないか」

凱歌がすっかり覚悟を決めて、身を硬くしている。雪那が笑った。

「お前、緊張するな」

「献血みたいなもんだよ」

「堵隠、向こうを向いている」

命は肩をすくめて、くるりと背中を向けた。

「鬼の子、目を閉じてくれ。見られたくないんだ」

雪那が軽く凱歌の肩に手をおいた。凱歌は静かに目を閉じた。吹雪の音。そして唇に、清くて冷たい雪が舞い降りた・・・。

白い雪の精の姿を取り戻した雪那と堵隠命が、柔らかな草の上に眠る凱歌を見下ろしている。命が彼の黒い上着をふわりとかけた。

2人は山の奥へと歩き出す。が、

「未練を」

そう言って、雪那が凱歌に駆け寄った。膝をつきささやく。

「どこへも行く場所がなくなったら、ここへ帰って来い。そうしたら、永遠の命をやるよ」

「おい」

神がとがめるように声をかける。

「希望をひとつぐらい、持ってもいいだろう」

寂しく笑う友に、やはり笑顔で応えてやる。

「そうだな」

立ち上がった雪那が、更に決心を口にした。

「行くよ。世話になったな」

「お前の山へ？」

「風がうるさいんだ。帰って来いって」

風が、雪那の長い髪をもてあそんでいる。夜明けが近い。

「辛いな」

いたわる言葉が、今は痛かった。

朝もやの中、山の草木の匂いを含んだ冷気と共に、凱歌は揺り起こされた。

「もし、どうなさいました？」

それは、堵隠神社の神主であった。

昨夜は神社のまわりの気色がおかしかった。様子を見ようにも体が思うように動かない。気ばかり焦るところへ、明け方、堵隠命が枕元にお立ちになった。ここに鬼がいるから朝粥でもだしてやれ。

「そう告げられましてな。いやいや、本当におりましたな」

きょとんとする凱歌に、神主は笑いながら言った。

「いえ、命のいつもの冗談ですよ。この里から鬼がいなくなって、もう久しいのです」

神主は熱い粥を運んで来る前に、傷の手当てをしてくれた。狼の刺青にも、眉1つ動かさなかった。世話を受ける後ろめたさから、口を開こうとするとその人は言った。

「命から何も訊くな、と言われておりますので」

そして、いつものことです、ともつけ加えた。

しみいるような優しさに甘えていたかったが、自分は引くことを知らなくてはならない人間だった。夜には出て行こう。再び街人（まち）の中の孤独（ひとり）へと帰って行こう。また、うつむきながら生きていくのだ。

「鬼の子・・・」

彼が懐かしそうにそう呼んだ。故郷（ふるさと）の人のように・・・。

「僕は、二度とここへは帰って来ない」

<おわり>

作品の中の謡曲は

「紅葉狩」観世流参考謡本 著作・丸岡 明
版元・能楽書林 より引用致しました。

最後に。

今回のお話を思いついたのは、冬木さんの作品「エピソード1.85」がきっかけでした。冬木さん、ありがとうございました。あたたかいお言葉にも感謝致します。michell 煌さん、クリス&ニールさん、今回設定にかぶりがあったにもかかわらず早く承諾して下さいありがとうございました。また、励ましのお言葉もありがとうございました。そして、本作品において、ウッチャン大好きっ子さんの作品「偽りと隠された真実」に類似した箇所がありましたことをお詫びいたします。ウッチャン大好きっ子さんには、たいへんご迷惑をおかけ致しました。にもかかわらず、快くお許し下さったことに感謝致します。そして・・・赤ばっとさん、いつも陰になり日向になり、力になって下さってありがとうございます。アップ、いつもご苦労様です。お世話になりっぱなしですみません。読者の皆様、最後までおつきあいくださり、ありがとうございました。いつもあたたかいお言葉、励ましを感謝致します。

恋人はスキップ